

タウラーの神秘主義における grunt 概念の分析(2)

— Vetter 版第16～27説教に基づいて —

Analyse vom ‚grunt‘-Begriff in Taulers Mystik (2)

— Die 16. bis 27. Predigten der Veters Ausgabe —

橋本 裕明 *HASHIMOTO Hiroaki*

(デザイン領域)

はじめに

前研究ノートに引き続いて、本稿でもドミニコ会説教家ヨハネス・タウラー（1300-1361）の説教を、その教導の思想の中心概念である「魂の根底 grunt」において読み解き、その独自の神秘主義の世界を確認することを意図した。本稿では、Vetter 版全81編から第16～27テキストを取り上げた。これら十二編のテキストは、復活祭から聖霊降臨祭までの50日の間に行われた説教と講話（コラツィエ）から成立しており、典礼暦に沿って置かれている。

タウラーはその教えにおいて、十字架の神秘主義ともいえるほどに受難のイエス・キリストを凝視し、その無私の愛と救いの働きを認識することの大切さを強調する。ここで取り上げるテキストでも、そのキリストへの霊的信徒、すなわち我意の否定（被造物への執着も含めた）と神への自己の奉獻の立場からは離れることはない。ただ、聖霊降臨の祝日を間近にして、聖霊を受けるにはイエス・キリストの形像を放棄しなければならないとする。それは、弟子たちとの別れの場面で、イエス自身の口から放たれた言葉であったからである。タウラーはここからさらに踏み込んで、イエスの形像自体は被造物であると語り、それへの執着は神性（との一致）への道の障碍となるとするのである。タウラーの神秘主義はここに至って、聖霊の神秘主義への展開を見せていると言えるであろう。

タウラーでは、イエス・キリストへの霊的信徒は、信徒側の徹底した自己否定による不可視の神性への自己の奉獻をベースとする。ただしその修練には、キリストの今も癒えぬ五つの傷をイメージし、その内に自己の実存を投入して一致するというような、一見黙想的なものも存在する（ただしこの修練も神の無相に届いている）。それでもその神秘主義の究極的立場は、エックハルトのような神性と魂の露体との一を目指すものであったといえるのである。

[16] ‘Expedit vobis ut ego vadam’

(1) „Wo wogestu durch Got lip und guot, liep und leit und lest dich selber und alle ding

usser dime innerlichen grunde do Got ein gebieter solte sin?“ (073/08)

- (2) „...enfrage nüt nach hohen künsten, denne gang in dinen eigenen grunt unde ler dich selber kennen...“ (074/26)
- (3) „...das were ware demuetikeit sunder alle glose und nüt in den Worten oder in dem schine, sunder in der worheit und in dem grunde...“ (075/31)

この説教は、イエスが「友」と呼ぶ弟子たちとの別離の場面を語るヨハネ16章5～14節の章句について行われた。聴衆は修道女たちで、復活祭後の第四主日のミサで行われたホミリー説教である。タウラーは間近に迫る（復活祭から50日目）聖霊降臨祭に向けて、聖霊を受けるための聴衆側の霊的準備を試みようとしている。

イエスが去ることは、人々をひとり放置することではない。逆説的であるが、人間の内面を徹底的に浄化する聖霊を送ることの前提である。では、聖霊は人間にいかなる働きをするのか。タウラーは、聖霊は人間の「この世的な生き方 die welt」を咎め、非難すると言う。そのために、自己の自然本性に従う人間は、「厳しい裁きと地獄の苦痛と耐えがたい苦しみ」(ein swinde urteil und ein hellesche pin und ein unlidelich we)¹⁾を体験せざるをえないのである。聖霊はその後、人間の「義」(gerechtekeit)を裁くとされる。この義とは、神に身を委ねず、自分の生き方を押し通す独善である。人間は、聖霊によってその義が徹底的に否定されることになり、「(我性の)放棄 gelossenheit」と「謙遜 gemuetikeit」、その他すべての事柄を学ぶことになる。

次に、タウラーは「裁き urteil」に言及し、人間は自分だけを裁くべきで、大罪の場合を除いて他人を裁いてはならないと厳しく警告する²⁾。裁きは、人間の「高慢 hochmuetikeit」と「自己満足 eigene gevallunge」から来るものであり、それ自体、心の深みに蒔かれた「悪魔の種 vigentlich same」だからである。人間は謙遜を体し、「霊的の清貧 armuote seines geistes」を守り、愛と柔和の心で行うべきなのである。タウラーは本説教で、修道女に対して、専門的な神学的探究³⁾は大切ではなく、自分の魂の grunt の状態を調べることを優先せねばならないと言う。そして、人間の自然的傾向に抵抗する、つまり「自然的諸能力の一つひとつ死ぬこと」(in ieglichen tode der naturen)⁴⁾で、真に神と出会うべきだと強調する。さらに、聖霊は世俗の事柄については助言せず、霊的な堕落状態を告

1) V.73.

2) その断言は「私ならば人を裁くよりは、むしろ自分の舌を引き裂きたい」(lieber wolte ich mine zunge bitten swerlichen dan ich enkein mensche urteilte) (V.74) というほどである。

3) この内容としてタウラーは「神の神秘、流出と還帰、無における有、魂における魂の火花とその火花の本質について」(von der verborgenheit Gotz, von dem usflusse und influsse und von dem ihte in dem nihte und von dem funcken der selen in der selen in der istekeit)の考察を挙げているが、これは例えば、エックハルトなどの神秘主義は真正ではあるが、その大胆な表現から生まれる誤解は大きな危険を生んでしまうことを仄めかしているのかもしれない。また、神学的問題に拘泥して信仰的に墮落してしまった例として、タウラーはアリウスとシビルス、ソロモンとオリゲネスを挙げている。

4) V.75.

発するのだと述べる。しかし、この告発こそは、人間に「純粹で luterlich 明るい clerlich」認識を与えて、人間を救いに導く、きわめて重要なものなのである。タウラーはそこで、聖霊を受けるための準備の仕方を告知する。それは、真にへり下って「神と被造物の下位に身を置く」(einen gantzen under wurf tuon under Got und alle creaturen)⁵⁾ 修練を積むことである。それが「熟練 künste」の状態にまで達しなければならないと語る。

本説教で用いられている grunt の中で、(1) は罪びとの言葉ではあるが、タウラーは彼らに内面の魂の grunt を指摘させている。(2) は、人間が自己自身を認識すべき場所である魂の grunt を意味する。(3) は修練を積み重ねて「熟練」に至る場であり、魂の浄化が目指される魂の grunt である。

[17 = 60a] 'Dixit Jhesus discipulis suis.'

- (1) „...ir herze und ir grunt, ir minne und ir meinunge die ist besessen mit froemder minne,...“ (281/06)
- (2) „...dise menschen kument mit iren weltlichen hertzen, mit irem besessen grunde,...“ (281/16)
- (3) „Und hie bi wirt sin grunt als hert als ein mulistein...“ (281/23)
- (4) „...es si an tuonde oder ein lossende, wo wirt man des grundes so gewar,...“ (281/26)
- (5) „Liebes kint, vor disem steinin grunde huete dich...“ (281/28)
- (6) „...nement uwers grundes war.“ (282/03)
- (7) „Dise slangen die sint och wo klein als blintslichen: das ist verborgen ungunst und behende stiche und verkleinunge di us einem boesen grunde her us slichent;...“ (282/24)
- (8) „...als der grunt sich endecket, der valsche besessen grunt...“ (282/31)
- (9) „...der valsche besessen grunt, so vallent si in missetrost...“ (282/32)
- (10) „...das man des grundes und der gebresten nut war ennimet: das sit ein hert soergklich ding.“ (282/34)
- (11) „Kinder, wistint ir wie soergklich dise lute mit disem besessen grunde...“ (283/05)
- (12) „...enphiengent und irs falschen grundes noch irre gebresten nüt war ennement...“ (283/07)

本説教は、キリスト昇天祭（復活祭第七主日で、聖霊降臨祭の一週間前）前の三日間の準備日の第一日目に朗読される、ルカ11章5～13節に基づくホミリー説教である。

5) タウラーの説教で頻出する表現であるが、神秘主義一般の霊的立場と言えよう。

タウラーは冒頭で、とある男が友人の訪問を受けたさいに、もてなすものがないので、別の友人のところに行ってパンを三つ貸してほしいと願ったところ、子どもと一緒に床についてしまったので煩わせないで欲しいと断わられた、というキリストが語った喩えを導入する。その上で、その中に含まれる三項のキーワード「願う bitten」「探す suochen」「叩く kloppen」を取り上げ、その意味について考察を深めようとする。

まず〈願う〉であるが、これは「神を心から憧れ、内向させた心底で神から何かを願う」(ein zuogekert gemuete mit einer inniger begerunge zuo Gotte und heischen etwas von im)⁶⁾ことに外ならない。〈探す〉ことは、「さまざまなものから一つを選び出す」(ein us erkiesen eins für das ander)⁷⁾ことであり、さらに〈叩く〉とは「目指すものを得るまで我慢し、諦めることがない」(ein volherten und nüt ablossen bis man das erkrieget das man meinet)⁸⁾ことだと解釈する。

次に彼は、この福音箇所に関する教父ベータ⁹⁾の読み方を引用する。それによれば、男を訪問した友とは「心底 gemuete」¹⁰⁾を指す。しかし男は何も提供することができないので、友すなわち「神 Deus」のもとに行き、戸を叩いて三つのパンを願い求める。そのパンとは、「三位一体の認識」(intelligentia Trinitatis)¹¹⁾にほかならない。煩わせないで欲しいと言うのは、「神を観想し始めている」(coeperit ac spiritalia meditari)¹²⁾師たちである。しかし、男である gemuet は、神自身を直接与えてもらうまで戸を叩き続ける、というものである。

タウラーはこのベータの解釈をふまえて、人間が心から神に願えば、神は言語と理解を超えた慈しみを喜んで与えられるのだと結論する。ここで、「子どもたちが魚を求めるのに、蛇を与える父親がいるだろうか、卵を求めるのにさそりを与えるであろうか」(ルカ 11.11-12) というイエスの言葉が引かれる。

それでは、人間は何をどう願うべきなのか。説教家はその〈願い〉を祈りへと置きかえて、人間は何よりも自分の gemuet を散漫状態から引き戻して、神の前にへり下り、神の心の戸を叩いて、愛というパンを求めるべきだ、と語る。また、人間は何よりも我意を抑え、神が自分に相応しいと判断して与えられるものを願うべきだとする。

6) V.279.

7) Ebenda.

8) Ebenda.

9) ベネディクト会司祭、歴史家、聖書注解者であった英国人 Beda Venerabilis (673頃-735) のこと。タウラーはここで In Lucae Evangelium Expositio から引用している。ただし彼がどの文献に依拠したかについては確かめられなかった。

10) ベータは “Amicus qui venit de via, ipse noster est animus” としているが、この animus をタウラーは gemuet と訳した。ベータの解釈の引用箇所は、Beda Venerabilis, In Lucae Evangelium Expositio, S.471-472に見られる。(http://www.documentacatholicaominia.eu/04z/z_06270735__Beda_Venerabilis__In_Lucae_Evangelium_Expositio_MLT.pdf.html)

11) Ebenda. ベータは “intelligentiam Trinitatis” と表現している。

12) Ebenda.

さらに〈探す〉であるが、タウラーは端的に、これは「神の意志と人間の最高のあり方を探す」(den liebsten willen Gotz und des menschen bestes)¹³⁾ことだとする。神は、願う者には与えられると述べるが、それには「心と grunt、愛と意向」(ih herze und ir grunt, ir minne und ir meinunge)¹⁴⁾が被造物への執着や我意で塞がれている状態を克服できていなければならない。自己の魂の grunt を認識せよ、これが第一の前提である。石のように硬化した魂の grunt、これを有する人々には、神は魚の代わりに蛇、すなわち他人への裁き、卵の代わりに蠟、すなわち神への偽りの信仰、信頼、厚かましさを与えられるのだ、とタウラーは言う。その grunt を保ち続けて生き続ければ、最後には永遠の死に至ってしまうのである。だから、自省して自分の頹落状態を認識し、その上で心を改め、聖体を受けて秘跡の力で甦らされねばならないのである。彼は最後に、人間が叩くべき三つの戸を挙げて、説教を結ぶ。

その一つは、信心を込めてキリストの「開かれた愛すべき心と脇腹を」(vor dem minneklichen uf getanem Herzen und uf geslossener siten)¹⁵⁾叩き、自己の無を徹底的に認識して、その内に自己を運び込むことである。つぎに「聖なる両手の開いた聖なる傷という戸」(vor den túren uf getaner wunden der heiligen hende)¹⁶⁾を叩き、神へと高めてもらう真の聖なる認識を願うことである。最後に、「聖なる足の(傷という)戸」(vor den túren der heiligen fuesse)¹⁷⁾を叩き、主との完全な一致を、また、主へと完全に沈め込んでくれる神の愛を求めることである。

本説教の grunt は全部で12を数える。(1)は心、愛、意向とともに、異様な愛に支配される可能性のある魂の grunt を指す。(2)も同じ魂の grunt である。(3)は石臼のように硬化しうる魂の grunt であり、(4)は人間がつねに認識しているべき魂の grunt である。(5)は、人間が注意すべき石化した魂の grunt をいい、(6)も認識すべき魂の grunt を指す。(7)の grunt は墮落した悪い魂の grunt であり、(8)のそれは、覆いが取られる魂の grunt、(9)はやはり墮落した偽りの(被造物などで塞がれた)魂の grunt である。また(10)は認識すべき魂の grunt、(11)は(9)と同じ墮落した魂の grunt、最後の(12)の grunt は本来認識すべきである偽りの grunt である。

[18 = 60b] 'Recumbentibus undecim discipulis.'

- (1) „...die etwenne von Gotte etwas berueret sint gewesen, das si slaffende oder wachende, und gemant in dem grunde und dem enpfallen sint.“ (286/08)

13) V.280.

14) V.281.

15) Ebenda.

16) Ebenda.

17) Ebenda.

- (2) „...von innan in dem grunde do inhant si (das lebende wasser) nüt.“ (286/27)
- (3) „...das sint geistliche lúte, und die als gar die lebenden easser gelossen hant und in der gründe als wening woeres liechtes ist und lebens, denne alles uswendige ding...“ (286/30)
- (4) „...von innan in dem grunde, do es her us solte springen und qwellen, da enist al ze male nictes nicht.“ (287/02)
- (5) „Ensint das nüt werlichen die cisternen do nüt inne ist das us dem grunde us gesprungen oder gequollen si, denne alles von ussen in komen...“ (287/04)
- (6) „Su(geistliche lúte) enkerent sich in den grunt nit: do inne hant si kein qweln noch dúrsten, noch si ensuoquent nüt fúrbas.“ (287/08)
- (7) „...so blibet in dem grunde hofart, eigenwillikeit, hertmuetikkeit und swer urteil...“ (287/22)
- (8) „...wer der lebende burne ie geqwoollen in úwern dúrren grunt...“ (287/30)
- (9) „...alles gelich wore goetliche minne in dem grunde her us qwellende...“ (287/31)
- (10) „...mit valscher schinender heilikeit und nüt woeres lebendes grundes in in ist...“ (288/09)
- (11) „Nement úwers grundes war und sehent fúr úch und sehent fúr úch...“ (288/25)
- (12) „...bichte mir zuo grunde das du eine cisterne als vil und als lange bist gewesen, also das du die lebenden wasser nüt getrunken enhast...“ (289/29)

本説教は、キリスト昇天の祝日に朗読されるマルコ16章14～20節に基づいて行われたものであるが、タウラーは復活者イエスに栄光を帰すその内容から14節のみを取り上げて、修道者の悔悛を促すことを目的にした説教に仕上げている。この節は、(十字架上で)死後に復活したキリストが、弟子たちが集っていた場に現われ、彼らの信仰の弱さと心の頑なさを責めたことについて述べている。タウラーはこの句を念頭におき、キリストはさらにどの時代においても、世の全ての人間に対して同様のことを行うという。そのさい特に厳しく責められるのは、修道会の会員、修道女、ベギン会員など、いわゆる修徳を目指す聖職者たちである。その理由は、聖職は誰もがつける身分ではなく、神が一定の人々を尊い霊的生活を送らせるべく選び出したものであるからである。だが、タウラーの目から見れば、多くの聖職者の不信心ははなはだしく、彼らは自己中心的な生活を送り、神にも人にも心を開いていない。彼らはその不面目を徹底的に反省し、その罪の事態をはっきりと認識しなければならない。タウラーは、もしそれをしたなら何とか救われるかもしれない、と半ば消極的な物言いをする。

これらの聖職者の心の状態は、タウラーにとっては、預言者エレミアのいう「水溜め cisterne」である。内には雨水やその他の汚水がたまっており、悪臭を放っている。魂の

grunt から滾々と湧き出る生きた水がないからである。それは、彼らが感覚的で形式的な修練の方法やその内容に捉われ、自分の作意を放棄して魂の源泉である grunt に還帰しようとしていないことを意味する。かくて、魂の grunt には、高慢、我意、頑なさ、裁き、非情な言葉と行為などが蔓延っているわけである（ここで、ベギン会員への当時の社会的な差別意識が紹介されている）。

次にタウラーは、高度に知的な人間も「水溜め」であると言い切る。世間の人々が彼らの幅広い知識と弁才を称えていても、そこに生きた水が湧き出る grunt がなければ何の役にも立たない。たとえ最後に救われるのだとしても、彼らは神から遠く離れたところに留まって、煉獄の激しい苦しみに苛まれていなければならないのである。

だからこそタウラーは、自分の魂の grunt が何を求めているのか、自分が何と関わっているのかを明確に自覚せよという。その上で、柔和となり謙虚になって、自分の存在を神と被造物の下に位置づける——自分は他の被造物よりも無価値であるという認識——ことの必要性を語るのである。それをしない人間の悲惨は、自分の魂に神が内在し、自分が魂の内に天国を有しながらも、その中に突入できないところにある、とタウラーは断言する。

タウラーはさらに、キリストが指摘する、人々が行ってきた「姦淫 unküschheit」に触れて、これを霊的な観点から、それを「いまだに諸形像に執着している *uf den bilden verbliben sîn*」事態だと解釈する。

そしてエレミアを通して、キリストが「あなたが私に還るなら、私はあなたの内に生ける水と真の愛を注ごう」（*Wer das du dich woltest zuo mir keren, so wolt ich dir in Giessen lebend wasser und wore minne*）¹⁸⁾と語ったとし、リカルドゥス（サン・ヴィクトル派）も、この生ける水の関連で、愛の四段階を説いたとし、それを説明する。

愛の第一段階は「傷つけられた愛」（*wunde minne*）¹⁹⁾であり、神の愛の光線は魂を傷つけ、また生きた水を魂に与えたために、逆に神に傷をつけるのだとする。第二は「捉えられた愛」（*gevangene minne*）であり、次は「苦しめる愛」（*qwellende minne*）であり、最後に「焼きつくす愛」（*verzerende minne*）が来る。最初の段階は、商売のために船出する商人にたとえられ、商人である人間は各所で様々なもの、すなわち「全ての形像、思考、修練」（*alle bilde und gedenke und uebung*）²⁰⁾を集め、荷を一杯にする。嵐が来たら舵を底なしの海へ、すなわち自己を神性の内へと投げ込む。魂は「神の流出 *goetliche usflüsse*」を自己の内に引き込み、その程度が高まるにつれ、いっそう広くなり、愛の新

18) V.290. 福音書内のこの正確な引用箇所は不明である。

19) リカルドゥスの 'caritas vulnerata' の訳。以下、'caritas ligens' は 'gevangene minne' に、'caritas quae lanquidum facit' は 'qwellende minne' に、'caritas quae defectum adducit' は 'verzerende minne' にというように、中高ドイツ語に訳し直されている。（http://www.documentacatholicaominia.eu/02m/1162-1173__Richardus_St.Victoris_Prior_Tractatus_De_Gradibus_Violntae_Charitatis_MLT.pdf.html）

20) V.291.

たな傷を受ける。神は魂の「受容力 *enphenglicheit*」を完全に満たすのである。つぎに「捉えられた愛」であるが、神が船の帆綱を切って、船が嵐の中に突入すると、もう權も舵も船を止めることができないが、これは自己を支配できないことを意味する。

こうして最初の二つの愛について語った後、タウラーはその次の段階の愛については今後語るとして、説教を閉じる。

本説教では12の *grunt* が現われる。その(1)は神が人間を戒める場なき場である魂の *grunt* を意味する。(2)の *grunt* は、生きた水が湧き出ることのない魂の *grunt* であり、(3)は本来的に神の真の光が射し込むはずの魂の *grunt* である。また(4)と(5)の *grunt* は、水が噴出し、湧き出る魂の *grunt* を意味する。(6)は人間が還帰すべき魂の *grunt*、(7)は高慢など悪徳が入っている魂の *grunt* である。さらに(8)は生きた泉が生じる可能性のある涸れた魂の *grunt* であり、(9)は水が湧き出る魂の *grunt*、(10)は本来真の生きた水がある湛えられているはずの魂の *grunt*、(11)は、タウラーがつねに戒める、魂の *grunt* を認識せよとの内容。(12)の *zuo grunde* は「心から」という強調表現である。

[19] 'Von fünf kunne gevegnisse.'

- (1) „Ouch, waz sol man des alhie vinden, also man in den grunt kummet!“ (077/10)
- (2) „Das nu grosse heilikeit schinet, was valsches grundes sol alhie funden werden!...“ (077/11)
- (3) „...daz trucket alles sich nider in den grunt, es wiset sich und duncket sich der minste...“ (078/03)
- (4) „...es suochet als den indewendigen grunt darus es geborn ist, do ilet es wider in mit aller kraft!...“ (078/06)

この短いテキストは、おそらく修道院内で行われた「コラツィエ」(霊的講話)の記録ではないかと推測される。タウラーは主の昇天祭の朝課で唱えられる詩篇68章19節における“*ascendisti in altum cepisti captivitatem acdepisti dona in hominibus et enim non credentes inhabitare Dominum Deus*”(「あなたは高い天に昇り、捕われた者を引いて行き、人々を貢ぎ物として、背く者さえ貢ぎ物として取られる。神である主がそこに住まわれるために」)から、‘*captivitas*’を‘*gevegnisse*」[捕われ]と訳した上で、話を進める。そして独自の立場から、信徒の魂の内では生きているキリストは、長い時間をかけて信徒を五つの「捕われ」(不自由)から解放する、と述べる。

第一の「捕われ」とは、「被造物に対する愛 *minne der creaturen*」を意味する。これには二種類の害があるとされ、その一はその執着状態を自覚していて、良心の呵責と不安を感じる害である。ただしわれわれの説教家は、これは神に見捨てられていない証拠である

と言う。次は、執着を放置したままの危険である。この人々は立派な信心生活を送っているようだが、実際は深刻な魂の状態にある。

さらなる「捕われ」は、自分と被造物への執着から解放された後に、また特別な仕方でも自己愛に陥ってしまうことである。神以外の誰もこの危険から救い出すことはできないとタウラーは語る。

第三番目の「捕われ」とは、「知性 vernunft」の次元のものである。タウラーはエックハルトや従来の神学者とはちがひ、知性の価値を高く評価しながらも、自らの司牧体験から、それが霊的高慢へと転じてしまう危険をたえず指摘している。イエスの人性すらも神の超自然的光に照らされれば、知性が見るものとは異なるのである。神学書を紐解くことと霊性を深めることでは、大きな隔たりがあると語る。

次は「霊的甘美 suessekeit des geistes」である。この甘美な体験に耽溺する人間も、その状態を乗り越えずに死んでしまえば、救われるかどうかは保証できない、とタウラーは言う。

最後は、「自我 eigenwille」による「捕われ」である。それは、神や神的な事柄を求めるにさいして常に我意が介在する危険である。神が欲するとおりに受けるという徹底した自己放棄を、タウラーは自分に対しても要求する²¹⁾。そして、人間としてのキリストを手放さず、その像に頑なにしがみついている生き方は、神性 (gotheit) への到達を妨げるのだと語る。

タウラーは人間の年齢的成熟を考慮して、四十歳まで霊的な落ち着きを待ち、その後十年をかけて聖霊の導きを受ける必要があるとする。その中で「還帰し、沈潜し、融解し、純粹で、神聖で、単一なる内的善と一となる」(eine inker, ein insincken, ein insmeltzen in daz goettliche einveltige indewendige guot haben)²²⁾ 体験を得るべきなのである。

本テキストの grunt は、全部で4つある。そのうちの(1)と(2)は魂の grunt であり、その転落の可能性が直指されている。(3)は魂の grunt とも、「徹底的に」という意味で根底にまでも、読むことができる。(4)は明らかに、神の光が照射する場としての魂の grunt である。

[20] 'Do der minnecliche.'

- (1) „...sin grunt und sin ende und selikeit und unser selikeit ist rechte ein selikeit in ime:...” (081/11)
- (2) „...wir sint uz dem selben grunde heruzgeflossen, und mit allem dem daz wir sint,...“

21) タウラーはこうキリストに祈っている。„nein, here, nüt min gnode oder goben oder wille, sunder, herre, wie du wilt, herre, so nim ich es oder so wil ich es.“ (V.79)

22) V.80.

(081/13)

- (3) „...so gehoerent wir rechte in das selbe ende und wider in den selben grunt...“
(081/14)
- (4) „Kinder, also alle die gründe die von dem agesteine Christo ie beruert wurdent...“
(081/27)
- (5) „...so der grunt ie werlicher und grüntlicher beruert ist...“ (083/21)
- (6) „Hastu dis, so bistu andechtig in der worheit in dem grunde.“ (084/19)
- (7) „Mer dis werg der andacht das ist daz der grunt mit minnen und mit flisse werde dicke erfrischet und ernuwet...“ (084/20)
- (8) „...mit flisse werde dicke erfrischet und ernuwet und gngesehen weles der grunt der meinungen in allen wisen unde werken si...“ (084/21)

このキリスト昇天の祝日では、天に上るくだりを伝えるマルコ16章19節の“et Dominus quidem postquam locutus est eis adsumptus est in caelum et sedit a dextris Dei”(「主は弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた」)が朗読されたが、テキストの冒頭では、その内容がさらに膨らまされて、キリストが自分の復活を信じない弟子たちの不信仰を咎めたことまで述べている²³⁾。このテキストも内容から見て「コラツィエ」と判断される。

タウラーはこの講話で、昇天するキリストは、自分の「友」すなわち信徒の「心と思いと内的諸能力、外的諸能力」(hertze und sinne und krefte indewendig und ussewendig)²⁴⁾をも、天に向けて引こうとする、という。そのわけは、信徒の生活上のすべてが本来、天にあるべきものだからである。こうして肢体は頭に従うのである。この天とは、まさしくイエスも信徒も流出した源を意味し、ここでもその源へ還帰することになるという、新プラトン主義的循環が語られている。「私たちは同じ源から流出したのであり、この存在全体によって同じ目的地に向かっており、同じ源に還帰する」dem daz (wir sint uz dem selben grunde heruzgeflossen, und mit allem dem daz wir sint, so gehoerent wir rechte in das selbe ende und wider in den selben grunt.)²⁵⁾、とタウラーは言う。しかしこの還帰による至福には、やはりキリストと同じ「苦難」の道筋を通らなければ到達できないのである。それは、キリスト信徒が全ての師の教導と万巻の書の教えを超越するのだからである。キリストは磁石として、鉄である信徒を引きつけ、神は獵犬を用いて、鹿である信徒を狩る。こうして神は人間の魂に触れようとするが、残念ながら、人間は自我に支配され

23) そのさいタウラーは、ラテン語の 'Dominus' を 'der minnecliche Christus' に変更しており、この部分がフェッター版第20説教のタイトルとなっている。また「オリブ山で」という語もラテン語の句にはない。

24) V.81.

25) Ebenda.

ていて、被造物への執着を離れず、魂の grunt を塞いでしまっている。ここからの転換は、「大胆で雄々しい確固たる態度と心からの切なる祈り」(mit eime geswinden dappferen ernste und mit hertzelichem innigem steten gebette)²⁶⁾による外はない、と説教家は語る。

次に説教は、キリスト昇天の場所的説明に入り、まずオリーブ山が挙げられる。そしてタウラーは、魂とはその山であるべきだ、つまり、魂は「低次の儂い事物を超越する高貴なものでなければならない」(muos...über dise nidern vergenglichen ding erhaben sin)と²⁷⁾言う。また信徒は、聖なる三位一体が内に光を照射し、そこで自由に働ける場を魂の内に用意していなければならないとする。さらに、このオリーブ山は「平和 friden」を意味するエルサレムと「苦痛・従順・忍耐 ein pinlicheit, ein gehorsam und ein lidunge」を意味するベタニアの間にあったのだと説明し、ベタニアあつてのエルサレムであることを強調する。平和は苦難なしには獲得できないわけだからである。しかしさらに進んで、タウラーはこのエルサレムすなわち平和の内であっても、信徒はそこで死ななければならないという。イエス自身、まさしくこの地で十字架に架けられたからである。タウラーにとっては、これは徹底的な自我の死を意味している。そのための修練がさらに必要である。それはまず、自己の魂の grunt が目下いかなる状態にあるか、汚染されておらず純粹であるのかどうかを調べることである。そして、信心生活においてすら我意を通そうとする人間の毒性を乗り越え、魂の grunt を生きた泉のごとく保持することが求められるのである。

この講話では、grunt は比較的多く出るが、最初の (1)(2)(3) はいずれも魂の grunt というより、存在の流出および創造の根源である神性の次元ととらえるべきであろう。(4) は比較的珍しく grunt の複数形が用いられているが、これは数知れぬ信徒の魂の grunt を表したものとえよう。(5) は神やキリストが触れる魂の grunt を指す。(6) と (7) も同様に魂の grunt である。(8) は信徒の行為の「根拠」という意味で、grunt が用いられている。

[21] 'Fride in unfriden.'

- (1) „Die geburt die wiset sich do wo der grunt ire verjehunge heruskam; az enwaz nüt wesenliche Got...“ (086/26)
- (2) „Trage es rehte wieder in den grunt do es usgeflossen ist...“ (087/15)
- (3) „...bringet in der worheit fruht in deme grunde; do ist der bluome und die fruht ein, do Got ist und Gotte daz lit in dem liehte.“ (087/17)
- (4) „Darnoch so sicht der geist herwieder verre in den allertieffesten grunt der aller niedersten uebunge die er ie geuebete...“ (088/05)

26) V.82.

27) V.83.

(5)in den grunt der demuetekeit...“ (088/10)

この短いテキストも「コラツイエ」であると考えられる。冒頭に使徒言行録1章11b節とヨハネ3章13節を結合させた章句が置かれているため、キリストの昇天がテーマなのかと思われるが、内容はそれとは異なるものである。この講話でも三つの地理上の名称が語義的に解釈され、それに基づいて神秘教育の三段階が示される。E・ルカはこの講話が北ドイツ地方の諸写本に散見されないことから、南ドイツ地方での成立を推測しており、また成立の時期に関しては、内容の高い成熟度から、タウラーの晩年期の作ではないかと考えている²⁸⁾。

タウラーは最初に、前の講話と同じく、肢体である信徒は頭であるキリストに従って苦難の道を歩み、その栄光に入るべきである、とくり返す。つまり、自分の十字架を担うことが信徒の本来あるべき生き方だと主張するのである。

次にタウラーは、キリストが弟子たちに向けて、あなた方は「ユダヤ」「エルサレム」「サマリア」で「私の証人 *min gezüg*」でなければならないと語った事実(使1.8 b)をふまえて、この三つの町の名称の意味を考察する。エルサレムはほんらい「平和 *friden*」を意味するが、この町は現実には、キリストが苦難を背負い、磔刑に処せられた「不和 *unfriden*」の場所となった。それゆえ、信徒も自分の「不和」である生活環境の中でこそ「平和」を追求すべきなのだ、とタウラーはいう。弟子たちの場合も、「不和の中で平和を得、苦しみの中で楽しみを、死においていのちを得た。また尋問され、裁かれ、罪を宣告され、喜ばしき勝利を得た」(*sú nament fride in unfride und in liebe leit, und in dem tode nament sú daz leben und einen froelichen sig, also man sú vor gefragete und verurteilte und verduemete.*)²⁹⁾のである。ユダヤとは「神に告白する *Got begehén*」を意味することから、この行為において証人となるということに外ならない。外的なことであろうと内的なことであろうと何であろうと、神から与えられる逆境において示されねばならないわけである。それによって、人間の「全ての支えが砕かれ、本来無一物であることが示され、神に本質的にとどまり、人間が素朴で単純な信仰だけを真の支えとする」(*alles enthalt gebrochen werde und uf sin blos luter niht gewiset werde und uf Got wesenlichen blibe und sin vergehen alleine in eime simpellen einveltigen gebouben*)³⁰⁾ことが可能となる。また、ユダヤは「神を賛美すること *Got loben*」をも意味し、そこからタウラーは、自己とともに神から受けた全ての賜物を感謝しつつ、神に帰すことだという。さらにサマリアで証人になることであるが、サマリアが「神との一致 *vereinunge mit Gotte*」の意味であることから、これを「最も真実で最も確実である証言」(*daz*

28) 『タウラー全説教集第Ⅱ巻』(E・ルカ編/橋本裕明訳)、行路社 1991年、254頁。

29) V.86.

30) V.87.

allerwareste sicherste gezúg)³¹⁾だとする。ここで人間の最上の諸能力は高く上げられ、さらに最低の諸能力も引き上げられることにより、人間は至福を感じ、神を「享受する gebruchen」のである。

そうして人間は、最後の段階すなわち「神の本質 daz goetteliche wesen」へと導かれる。霊はここで自己を完全に失い、神の「深淵 abgrunde」で融解してしまうのである。もはや霊は、「唯一の純粹で裸の単一な神しか知らず、感じず、味わうことがない」(er nüt enweis, enfuelet noch ensmacket dan einen einigen lutern blossen einvaltigen Got.) のである。

本テキストでは grunt は、5回使用されている。そのうちの(1)は、告白の「原因」を表す。(2)は全被造物の源泉である根底であり、(3)は神からの光が神という光とひとつである魂の grunt を指す。つぎに(4)であるが、これは最も初歩的な修練の土台を意味し、(5)の grunt は名詞であるが、意味上は「まったき」というように形容詞としての働きをしている。

[22] 'In diebus illis reversi sunt apostoli ad montem qui vobatur.'

- (1) „Wer sine meinunge in dem grunde innerlich uf út anders richtet und út meinert, der enmeint daz luter guot das Got ist,...“ (089/26)
- (2) „...der mensche der in disen grunt geratet und in dise wise, das er in sin nüt kunde kummen,...“ (090/22)

これはキリスト昇天祭と聖霊降臨祭の間の時期に行われた説教であり、朗読箇所の使徒言行録1章12～16節に基づき、修道女らに聖霊を受けるための準備を説いている。

タウラーは、イエスの死後、イスカリオテのユダの後任としてマティアスが選ばれた経緯をふまえて、独自の神秘主義的な教導を行う。まず先の講話と同じく、エルサレムは「平和」を意味するが、それは「不和」を前提としなければ真実のものではないとし、逆説の論理に言及する。タウラーは、弟子たちはオリーブ山に赴いたが、これは「山 berg」であったと語り、アブラハムのシナイ山登攀と関連させて、人間は諸能力と「心底 gemuete」とともに(神に向かって)上って行き、「低次のすべての被造物を超え、永遠の高みに登らねばならない」(von not ufgon...in die hocheit der ewikeit über alle dise nidern geschaffenen ding)³²⁾と言う。次に、弟子たちがエルサレムの最後の晩餐の「食堂 cenaculum」に戻ったことを念頭において、食堂とは真に安らぐ場であり、人間は魂の

31) Ebenda.

32) V.89.

grunt に沈潜し、「永遠の休息 ewige raste」を味わうべきであると語る。

その後、この食堂ではユダの後任が決められたのであるが、タウラーはここでもこの名の象徴的意味を取り上げる。ユダとは、神が与える善の「すべてを盗みとり、裏切る、悪い搾取行為」(die leide annemlicheit, die stilt und verratet alles das guot)³³⁾に外ならないとされる。

ペトロはこのユダに代わる新たな使徒を籤で選ぶことを提案したが、はたしてその候補者はヨゼフとマティアスであった。ヨゼフとは「義しい人 der gerechte」であり、彼は「忠実な男 der gehorsam」を意味するバラバの息子であった。もう一人のマティアスは「神の前で小さな人 der kleine vor Gotte」を指している。説教家は、マティアスが籤に当たった結果の理由として、義や従順、神からの慰めがどれほど偉大なものであっても、「小さく謙虚な者がすべてを凌駕する」(der kleine, der demuettige übertrifft alle ding)³⁴⁾からだとする。徹底した謙遜こそが神に生きる者には不可欠であり、まさしくその謙遜は、聖霊を受けるための「完全かつ真実な準備」(die nehste und die woreste bereitung)³⁵⁾であると結ぶ。

本説教において、grunt は2回しか現れないが、(1) は innerlich と結びついて魂の grunt を指し、(2) の grunt も、魂の grunt を意味している。またここでも、タウラーでは grunt と同義の gemuet (心底) が1度使用されている。

[23] 'Estote prudentes et vigilate in orationibus.'

- (1) „...mit dem liechte siner bescheidenheit alle sine werg, wort und gedenke durchsehe mit eime verstanden gemuete, obe út do si in dem grunde das Got nüt luterlich ensi oder Got nüt bloeslichen enmeine...“ (092/09)
- (2) „...in daz heimelich rich, in den wunnenclichen grunt, do daz edele bilt der heiligen drivalentikeit...“ (092/25)
- (3) „das man wenet das Got gemeinet si, und so man in den grunt kummet, so vindet man es nüt also...“ (093/17)
- (4) „Nu ist dise vergiftekeit die ist so tief in den grunt gewurtzelt das alle künsterliche meister disem mit sinne nüt enmogent nochgegon...“ (094/15)
- (5) „Diser valsche grunt in geiste und in nature wonet dicke do man wenet das es Got si zuomole...“ (094/18)

33) Ebenda.

34) V.90.

35) Ebenda.

本テキストも、昇天祭と聖霊降臨祭の間の主日に行われたものであり、やはり聖霊を受けるための準備をテーマとした説教である。そして、日々の霊的修練を経て長い時間をかけて獲得される「熟練 küntheit」こそが、準備には必要であると述べられる。タウラーはここでは、ペトロ第一の手紙の4章7節の中の「あなたがたは賢くあれ」という勧告に依拠して、教導を行う。

典礼暦ではこの後に「聖霊の派遣」が祝われるが、タウラーはこの祝祭を歴史的に一回限りのものとは考えず、「毎日、毎時間」(alle tage und alle stunt)³⁶⁾徹底的に準備した上で、挙行されるべき事柄であるとする。これはエックハルトの「魂における神の誕生」(gotes geburt in der sêle)にも通じる立場である。それでは聖霊を受ける条件とは何であるのか。タウラーはそれをペトロの「賢く prunders」の言葉に読みとり、聖霊を招くには、「真の離脱、空化、還帰、一致」(wore abgescheidenheit und lidikeit und innikeit und einikeit)³⁷⁾が不可欠だとする。ただしそれには、霊的修練が「熟練」の域にまで至らねばならないと言う。

そうしてタウラーは、最初の「離脱」の説明に入る。それは、神でないものを完全に見限り脱却する態度である。現実には、「判断力 bescheidenheit」の光を用いて、自分の行為や思考や言葉をたえず吟味し、自分の魂の grunt を神以外のものが占拠していれば、それらを徹底的に排除し、浄化するということである。「離脱」は聖霊を受け入れる条件なのである。ここから説教は散漫になっていき、話題が拡散する。

次にタウラーは、聖霊を受け入れる人々を三タイプに区分する。第一は、「五感を通じて感覚的形像的に」(in sinnelicher biltlicher wisen mit den sinnen)³⁸⁾受け入れる人々、次いで、五感をはるかに超越して「最上の諸能力と理性的諸能力へ」(in die oebersten krefte und vernünftigen krefte)³⁹⁾と受け入れる人々、最後に、「隠れた深淵、秘密の国、喜ばしき grunt」(in das verborgen abgrunde, in daz heimeliche rich, in den wunnenclichen grunt)⁴⁰⁾に受け入れる人々である。タウラーはこの grunt には、「三位一体の高貴な像が隠れている」(daz edele bilt der heiligen drivaltikeit verborgen lit)⁴¹⁾とアルベルトゥス(・マグヌス)と同様な見方を示している。そして、この第三段階の魂では、聖霊の賜物は「高貴かつ神聖なかたちで edellichen noch goettelicher wisen」受けられるとする。

通例タウラーは、「知性 redelicheit」を、知的高慢に導く危険が大なるものとして評価にきわめて慎重であるが、本説教では別の見方をしている。すなわち、〈知性〉は魂の状態を判断した上で、決然として神への道をたどるように自分自身に命じるものと位置づけ

36) V.91.

37) V.92.

38) V.92.

39) Ebenda.

40) Ebenda.

41) Ebenda.

られる。それは自然的な諸徳（謙遜・柔和・寛大・憐れみ・沈黙など）を整えるが、さらにその光は、四徳（上知・正義・剛毅・節制）を貫くのであり、そうしてはじめて聖霊は来て、超自然的徳（信徳・望徳・愛徳）と恩寵を注入するのだ、と述べる。

その後タウラーは、修練上の「不安や悲しみ *bandekeit, trurikeit*」に注意するようという。これは必ず起こることであるが、忍耐して神に身を委ねて回避せよ、と助言する。また、神から受ける賜物に——自己愛（自我）を交えて——しがみつくなと警告し、人間を神と疎遠にする自己愛の恐ろしさを説く。そして、自己愛を捨てるよりも城や土地や財産を捨てる方がまだ容易い、とさえ言うのである。

最後に、真に「賢くある」ためには、賢い蛇が二つの石の間を通り抜けて進んで行く話を取り上げて、イエス・キリストの人性 (*menschheit*) と神性 (*gotheit*) の間を通り、そこで自我の執着の対象 = 「自然本性として有していたもの」 (*von naturen haben*) を脱ぎ捨てねばならないと、タウラーはいう。真の離脱は、このキリストの中を通り抜け、擦られて、古い皮が脱ぎ捨てられることを必要とする。それが、聖霊を受けるために不可欠な、霊的修練の「熟練」のありようなのである。

本説教では、*grunt* は全部で5つを数える。(1)はその場に神でないもの（非神的なもの）が存在しうる魂の *grunt* を指している。(2)も同じく、本来的に三位一体の像が存在する魂の *grunt* である。(3)の *in den grunt kommen* は「根底を吟味する」という意味であり、この *grunt* も魂の *grunt* であると読める。(4)の *grunt* は、致命的な毒性がしみ込む魂の *grunt* であり、(5)は墮落する可能性があるため '*valsch*' とされる魂の *grunt* である。こうして本説教では、すべてが魂の *grunt* を意味している。

[24] 'Sante Peter sprach: sint.'

- (1)also sol der mensche mit vil grossem flisse sich selber umbegraben und sehen in sinen grunt..." (097/24)
- (2)in sinen grunt und keren rechte den werken den grunt umbe zuomole und behovwe sin bovme,..." (097/24)
- (3)so kummet denne die suesse goetteliche sunne, und beginnet die klerlich in den grunt, in den edeln acker lúhten klerlichen..." (098/07)
- (4) „Also der heilige geist gegenwerteklichen sinen wunneclichen glantz und sinen goettelichen schin mag unmittelichen in den grunt giessen,..." (098/16)
- (5)danne kummet es in den indewendigen grunt, in das verborgen des geistes..." (101/04)
- (6)also das Got in der worheit múge eigentliche ingon in daz luterste, in das innigeste, in daz edelste, in den innerlichsten grunt, do wore einikeit alleine ist..."

(101/29)

このテキストは、内容的からしてフェター版第23の続編であり、翌日に行われた説教である。前説教と同じく、聖霊降臨の祝日以前に成立したものである。タウラーは度々語りながら脱線する癖があるが——もちろん重要な点は指摘している——その傾向はここでも表れている。前回と同様、聖霊を受ける準備として、「離脱、空化、親密、一致」を話題にしようと試みるが、それは完結しない。ただし、説教の締めくくりで「一致」に触れて、何らかの結論を出そうと努力はしている。本説教は全体として楽観的な気分に包まれており、生真面目に宗教的真理に迫ろうとする常なるタウラーとは少し違った、別の一面を見せている。

タウラーは冒頭で、前説教と同一の「賢くあり、目を覚まして祈れ」の章句を示す。その上で、昨日の説教内容をくり返して、諸徳の修練を通しての「熟練」の必要性を語り、また聴衆自身に、自分の信仰生活が根底から神を純粹に目指したものであるかどうかを知性で判断し、そうでなければ直ちに改めるようにと説く。

次にタウラーは、三月に農夫がする「土を掘り起こす ertterich umbekeren」作業を例にとり、聴衆に向けて、魂の grunt を浄化することを求める。それは、大罪から始めて、内的・外的高慢、貪欲、怒り、嫌悪、妬み、不貞、体と心と霊の快を根絶やしにすることへと展開する。この掘り起こしが完了すると、神である太陽は「よく準備された畑 wol bereiter acker」すなわち魂の grunt を照らし始める。聖霊は grunt にその「喜ばしき輝きと神々しい光」(sinen wunneclichen glantz und sinen goetteloichen schin)⁴²⁾を直接に注ぎ、人間を慰めることになるといわれる。タウラーは、この体験はこの世のすべての喜びを凌駕すると述べる。

ただしタウラーは、この喜びに満足して立ち止まることに警告を発する。この「安らぎと快 raste und gemach」に満足して前進をやめてしまえば、真の求道は叶わなくなる。まさにここに大きな危険が潜んでいるのである。人間が自然的な「傾向性にある geneiget sin」その在り方を克服し、受けた聖霊の恵みにも執着することなく、それを神に自由に捧げ返すことが大切なのである。その恵みとは、さらに深い霊的次元に進むための糧にすぎない。信徒はこのことを自覚しなければならないのである。タウラーは、ペトロの「賢くあれ」の意味を、このように説明する。キリストの形像さえ、それを執着の対象としてしまうならば、聖霊を受けることはできないのである。

次にタウラーは「祈り」に言及する。しかし彼は口頭の祈りを何度もくり返すことの無意味を語る。そしてその上で、聖人や教師たちが伝統的に指摘してきた「神の内への心底の上昇」(ein ufgang des gemuetes in Got)⁴³⁾こそが大切である、と強調する。そのこと

42) V.98.

43) V.101.

は、魂が「愛と切なる願いにより、へりくだって神の下に身を投じる」(mit minnen in, in inniger begerunge, in einem demuetigen underwurffe under Got)⁴⁴⁾ことに外ならない。そうして神は魂の「至純、最内奥、最高貴、内的 grunt に入る」(in daz uterste, in das innigeste, in daz edelste, in den innerlichsten grunt ingon)⁴⁵⁾ことができるのであり、そのとき初めて「一致」が生起するのである。魂はここで「完全に融解し、自己と全事物から離れ落ちて沈み込み、神が本性的かつ自然本性的にそうである熱い愛の炎に」(versmiltzet der geist hier alzuomole und inzündet ime selber in allen dingen und wurt ingezogen in das heisse für der minnen)⁴⁶⁾引き入れられる。タウラーは説教の最後で、聴衆に対して、つねに grunt にとどまって活動するようにと促している。

本説教では、grunt は6回使われている。(1)と(2)はともに魂が畑の土にたとえられており、比喩的に魂の grunt を示している。(3)も同様に、太陽の光が畑の土に降りそそぐことから、神が魂の grunt を照らすとして、魂の grunt を意味している。(4)は聖霊が照らす魂の grunt、(5)はアウグスティヌスの「霊の秘所」(abditum mentis)と同義で、魂の grunt を語っている。(6)は神との一致が実現する人間の魂の grunt を指している。

[25] = [60e] 'Repleti sunt omnes spiritu sancto et ceperunt loqui.'

- (1) „...als ob er alles das ertrenken und versenken wolte, und fulte alle telre und die gründe die vor im weren.“ (304/32)
- (2) „...so füllet er und úber gússet alle die gründe und alle herzen und die selen wo er stat vindet:...” (305/03)
- (3) „Wie mag denne dem ze muote sin des herzen und sele und grunt, sin uswendig und inwendig mensche,...” (305/12)
- (4) „...also wúrket der heilige geist in dem geiste und in dem grunde des mensche unwissentliche.“ (307/08)
- (5) „...das muos geschehen mit widerboeigeten kreften wider in den grunt, do der heilige geist sine wonunge und sin werg inne hat.“ (307/09)
- (6) „...lovf in dich selber und domitte zuo Gotte und gip dich ime schuldig von grunde:...” (307/32)
- (7) „...daz get úch nút an, noch mit behenden worten und subtlen worten, sunder uz dem grunde der tugende.“ (309/09)

44) Ebenda.

45) Ebenda.

46) V.101-102.

このテキストは、聖霊降臨の祝日に朗読される使徒言行録2章1～11節に基づいて行われた説教であるが、この後の説教第26の内容と密接に関係している。タウラーの神秘主義では、この「聖霊降臨祭」は、降誕祭や復活祭よりも高い位置づけがなされている。

タウラーは、人間が楽園での罪により失った「宝」とは聖霊を意味しているとし、それはイエスの死後に実現した聖霊の降臨によって回復されたとする。しかし人間の知性には限界があって、この聖霊の内なる豊かさと愛と充溢は把握できない。聖霊は人間の魂の grunt を満たすのであるが、そのためには人間の魂の側が準備されている必要がある（ここで注目すべきは、タウラーが聖霊は「谷や淵 die telre und die tieffe」も満たすと言い、自然への働きをも考えている点である）。それでは、人間は聖霊の働きの場を自らの手で作り出すことができるのであろうか。タウラーは否と断言する。なぜなら究極的に、聖霊自らが聖霊自身を受け入れる用意をするものだからである。つまり、聖霊は人間の魂を空じて、その空じた分を満たすのである。それゆえ、完全な放棄の道として、「人間は（神に）捉えてもらい、空じてもらい、準備してもらい、すべてを放棄し、自己放棄において完全に放棄しつつ放棄し、その放棄しつつ放棄する態度にも依拠しないで、自己の純然たる無に沈み込まねばならないのである」（muos sich der mensehe lossen vahn und italen und bereiten und al lossen und des selben lossendes also gar und ze mole us gon und lossen und dannan ab von allem dem nüt enthalten denne vallen in sin luter nicht.）⁴⁷⁾と語る。また、未だその状態に至っていなければ、自己を神に完全に委ね、受け身にならねばならないという。そうしてようやく、聖霊はその富と宝の全てを内的諸能力と外的諸能力、最高の諸能力と最低の諸能力の内に注ぎ込むことになるのである。それには信徒の側で、聖霊の働きを切に望むことが不可欠である。しかしタウラーは、そうする人間が数少ないという現実を熟知し、それに言及する。

また説教家は、自己の内での聖霊の働きに気づいても、それを自分の力だと思い込んで、聖霊の働きに光栄を帰さず、その働きを台無しにしてしまう人間がいることを指摘する。この聖霊の働きをかすめ取ってしまう危険を、タウラーはくり返し説いている。

そしてタウラーは、人間が身につけるべき本来のあり方について、順次述べていく。まずそれは、自己が無であるとの認識に立って被造物と自分から解放され、その上で内的、外的諸能力を秩序づけることである。次に、内的に起こることであれ外的に起こることであれ、自分に降りかかる全ての事態を直接神から来るものとして受けることである。その理由は、神はまさしく人間側の苦難の忍耐を通じて、人間を聖霊を受け取ることができるように整えるからである。またタウラーは聴衆に、舌を制して（言葉に十分に注意して）語ることを弁えるように求め、他方では、神と多く語ることを勧める。ただし、知性で神性を議論してはいけないと釘を刺す。

47) V.306.

説教家は、聖霊の賜物は人間の内で働くことで、人間をその能力を通して、秩序に合わせて神に戻そうとすると述べる。ただし人間は、聖霊の働きを待ってさえすればよいのではない。あくまで自己を放棄する生き方を身につけ、隣人と平和な関係を保って日常生活を送るべきなのである。タウラーの神秘主義は、しばしば非難されたように、「静寂主義」(Qietismus)の立場ではない。聖霊の働きも、あくまで自力即他力、他力即自力の関係においてある。

本説教では、grunt は7度現れるが、その(1)は地形を示す「淵」を意味し、それゆえ魂の grunt ではない。(2)は心と魂と同じく、ともに複数で扱われており、魂の grunt を示している。(3)では、grunt はやはり心と魂との並びで扱われており、今度は単数であるが、魂の grunt を表している。(4)と(5)も魂の grunt である。(6)は von grunde と表記され、これは「心の底」からであり、魂の grunt ではない。また(7)は uz dem grunde der tugende であり、これは「徳の深みから」であって、魂の局所である grunt を指すものではない。

[26 (60e)] 'Repleti sunt omnes spiritu sancto et ceperunt loqui.'

- (1)so kummet der heilige geist alzuohant mit allem sime husrate und erfüllet alzuohant alle die winkele und den grunt;...“ (104/08)
- (2)fliehent aber nüt die wisen seligen menschen den nüt ensmacket wan Got und goetteliche ding, die ein ware Got meinen hant in dem grunde; war die uswert gont, so blibent sú doch alle zit inne und heime,...“ (105/19)
- (3)so vellet er heruf mit lust, und genueget in und minnet den lust und got also von dem woren grunde;...“ (107/29)
- (4) „Hie wurt er rechte zuo grunde gelossen, das er enweis von Gotte noch von genoden...“ (108/05)
- (5)versincket (der mensche) in den grunt des goettelichen willen...“ (108/13)
- (6)obe in Got ein ewigen hellebrant wolte haben in ewiger pinen, daz er sich darin zuo grunde gelossen kann...“ (108/17)
- (7)das muos er alles liden unde lassen sich zuo grunde darinne.“ (108/28)
- (8)übertretten alle ding und keren in den ursprung wider in, in den grunt und in Gottes willen.“ (109/02)
- (9)dise zwo goben die fuerent den menschen rechte alzuomole in in den grunt über menschliche wise in daz goetteliche abgrunde, do Got sich selber bekennet...“ (109/18)

このテキストも、前説教の第25と同じ朗読箇所に基づいて行われた説教であり、文体的にも内容的にも似通ったものとなっている。ただし聖霊を受ける準備をした後の、聖霊の七つの賜物についての考察は、この説教独自のものである。

タウラーは最初に、前説教と同じく、聖霊そのものは人間の「知性 vernunft」には測りがたく、捉えることができないという大前提に立つ。また聖霊を人間が受けるべきときには、その準備は聖霊自身が行ない、その「受容性 enpfenglichkeit」を作り出すという、前説教の認識を継続する。ただしここではその理由が説明される。それは、「言い表せぬ神の深淵が神自身の場であらざるを得ないため、被造物では神を受ける場を設けられない」(Das unsprechenliche abegrunde Gottes das muos sins selbes stat und der enpfenglichkeit sin und der creature.)⁴⁸⁾ということである。

聖霊はどの時、どの瞬間にも受けることができるが、そのためには人間側の自力の努力も必要であり、「全ての被造物から力を尽くして向き直り、神に戻るに依じて」(sich mit aller kraft von allen creature keren und sich zuo Gotte keren)⁴⁹⁾であると、タウラーは述べる。人間は外界に背を向けて、自己の内へと集中し、聖霊の働きの場を提供しなければならない。説教家は、外から悪い影響を及ぼす「ユダヤ人」を警戒せよという。タウラーはこのユダヤ人という表現で、外出の機会や人々との交わり、言葉と業とやり方の楽しみを意味させているが、文脈からは、現実のユダヤ人とも読め、とすれば——彼も時代の子であるのか——何か差別意識が潜んでいるといえようか。タウラーは聖霊が降ったその日に弟子たちが家に閉じこもっていた事実をふまえて、人間は内的にも外的にも全能力を集中して、全てのことを神の御旨に任せる必要があると説く。

次にタウラーは、聖霊の七つの賜物の説明に移る。最初の三つは、人間を「気高い真の完成に向けて準備し」(zuo hoher und zuo worer vollekomenheit bereiten)⁵⁰⁾、他の四つは、人間を完成させ、「真の完成という最高で至純の最も輝かしい終局点へと」(zuo dem hoehsten, lutersten, verclaresten ende der woren vollekomenheit)⁵¹⁾導くのだ、と述べる。

まず「神への畏れ(敬畏) goettliche vorhte」であるが、これが確実な土台となる。これは全ての過ちと妨げと害となる罫から人間を守る賜物である。つぎに「柔和なやさしさ(孝愛) senftmuetige miltekeit」が来るが、これは人間を内的かつ外的に神と親しませ、人間から「(自分の)無価値の意識と心の頑なさ」と全ての苦しみを取り除く」(unwertsamkeit und hertmuetikeit und alle bitterkeit benemen)⁵²⁾。さらに「知識(熟練) kunst」という賜物であるが、これによって人間は、いかにして聖霊の戒めを内面で知覚すべきであるかを教えられる。この後、「神による強さ(剛毅) goettliche stercke」という賜物が現われ

48) V.103.

49) V.104.

50) V.106.

51) Ebenda.

52) Ebenda.

るが、これは殉教をも可能とさせる、人間的な仕方と弱さと恐れを完全に克服させるものなのである。ここでタウラーは前説教と同じく、慰め主と呼ばれる聖霊の慰めに執着して、完全に立ち止まってしまう危険を説き、神自身に還帰して、「神々しく浄化されて全ての賜物と恩寵を突破する」(durch alle goben und gnade in verklärte lüterunge trigen)⁵³⁾ように、と論ず。

そして第五の賜物の「諦念(賢慮) rat」であるが、聖霊はこの賜物を与えて、徹底的に自己を放棄する術を教える。そうして人間は、自己自身を失い、神の御旨の根底に沈むことになるのである。それは、「全ての事物を放棄して乗り越え、再び源泉へ、gruntへ、神のみ旨へと還帰する」(alle ding lassen und übertretten und in den ursprung wider in, in den grunt und in Gottes willen keren)⁵⁴⁾道である。この賜物により、人間は「完全に天的で神的に」(zuomole himmelsch und goettelich) となると、タウラーは語る。

第六、七は、「信解(聡明) verstentnisse」と「体験智(上知) smackende wisheit」である。これらは人間をその「自然本性的な仕方を超えて、神の深淵へと至らせる」(über menschliche wise in daz goetteliche abgrunde)⁵⁵⁾とされる。そこでは人間の霊は認識を奪われて、神と融解するのであり、「ただ、純粹で露わな単一の神、言い表せぬ深淵、一つの本性、一つの霊」(ein luter blos einvaltig Got, ein unsprechenliche abgrunde, ein wesen, ein geist)⁵⁶⁾となるわけである。

本説教では、gruntは9度あらわれる。その(1)と(2)は魂のgruntであり、(3)は神の源泉か魂のgruntか、判断できないといえよう。さらに(4)はzuo grundeで「徹底的に」という意味、(5)は「神のみ旨の根底」つまり「神の本当のみ旨」のことであり、魂のgruntではない。(6)のzuo grundeは「完全に」を、(7)のzuo grundeは「徹底的に」を意味する。(8)のgruntは、魂のgruntよりも、根源たる神を指すというべきであろう。(9)は魂のgruntである。

[27] 'Dixit Jhesus discipulis suis: qui nn intrat per hostium.'

- (1) „...dem volget denne vernúten in dem hertzen und in dem grunde...“ (112/27)
- (2) „Was weistu dines nehsten grunt? was weistu Gottes willen an ime oder durch welchen weg das Got ime gerueffet oder geladet habe?“ (112/31)
- (3) „...so vindet diser morder den diep in dem grunde verborgen ligen, daz ist die unrechte unnemlicheit...“ (113/18)

53) V.107.

54) V.109.

55) V.109.

56) Ebenda.

- (4) „...in Gottes urteile, in Gottes willen, in Gottes grunt, wie, wo und wenne er wollte...“
(113/27)

このテキストは、聖霊降臨の主日後の一週間のとある日に行われた説教で、ヨハネ10章1～10節に依拠するホミリー説教である。この章句は、善き羊飼いきリストと、主キリストにだけ従って行く羊である信仰者について語っているが、説教家タウラーはそこに嵌め込まれた形象を比喩的に解釈しながら、独自の神秘主義的な教導を展開する。

人となったキリストを「門 túre」とする「羊小屋 schafhus」とは、父なる神の心である。諸聖人が集うこの「羊小屋」はこれまで閉ざされていたが、今やイエスによって開かれた。そこへ人間の魂という「羊」を導いていくのは、永遠のみ言葉たる「羊飼ひ hirt der schaffe」に外ならない。また聖霊がこの「羊小屋」の門番であるといわれる。

タウラーにとって、信徒の霊性を神との一致に向けて深める聖霊の働きは重要なものであるが、とりわけこの祝日の時期には強調されている。しかし同時に、聖霊の到来を何度となく、その悪意によって拒んでいると、エステル妃の物語に付託して語っている。

さて「羊飼ひ」が住み、休息する「羊小屋」に達するには、イエス・キリストという「門」を通らねばならないが、それには条件があるとタウラーはいう。つまり自己を放棄して神の栄光と御旨のみを求めることである。それが「羊飼ひ」に従う「羊」である。この「門」を通らず別の場所から「羊小屋」に入るのは、「盗人 diebe」であり「人殺し moerder」である、とヨハネ福音書は語る。「盗人」とは自己の知性を誇り、自己を否定しておらず、イエスの模範に従わない人々である。彼らは神と被造物において何でもかすめ取ろうと企む。彼らは「悪魔的な仕方て忍び寄り、神から栄光を、人間から全ての真実と完全性を奪い取る」(in túfelscher wísen zuoslichet und benimmet Gotte sin ere und dem menschen alle worheit und sú vollekomenheit berovben)⁵⁷⁾輩である。タウラーはこれを内面的傾向として厳しく糾弾する。また「人殺し」とは、人間に隠れすむ他者への仮借ない裁きだとする。そして大罪以外は決して裁いてはならぬ、裁かねばならぬ時は聖霊が裁くのであり、それを待たねばならぬという。他人の裁きに拘泥せず、自分自身を裁かねばならない。「人殺し」とともに自分の内面に還り、自分の真の姿を認識しつつ自分を裁くときには、神から受けた恵みを乗っ取る「罪人」を発見できるのである。この両者が刺し違えて死ぬのがいいとタウラーは語る。なぜなら「裁きはみな絶えて、神と神の裁きと、神の御旨と、神の grunt の中に落ちてしまい」(alle urteile stúrbe und viele alzuomole in Got, in Gottes urteile, in Gottes willen, in Gottes grunt)⁵⁸⁾、結果として「ここで真実の本来の平和が生まれる」(hie were wor wesentlich fríde)⁵⁹⁾からである。

57) V.112.

58) V.113.

59) Ebenda.

この平和を得た「羊」は、預言者ヨエルが語ったように、神の内に憩うこととなる。「門番は門を開き、歓迎して御父の深淵にまで至らせ、[...]羊は言い得ないほど素晴らしい糧を得、神性の内に沈み、自己を捨て、人となった聖なる神のもとで豊かな糧と喜びに達する」(tete der torwerter uf und liesse in rechte in in daz vetterliche abgrunde, ...er versünke mit unsprechenlicher weide in der gotheit und gienge mit minnen us an die heilige vergoettete minnenkliche menschheit in voller weiden und wunnen)⁶⁰⁾からである。

本説教には、全部で4つの grunt が認められる。その(1)と(2)と(3)は魂の grunt を指している。また(4)であるが、これはタウラーではほとんど適用されることのない「神の根底」、すなわち神の grunt を意味している。

60) Ebenda.